日常とローカリティ

丁 秀珍
JON Su-Jin
翻訳：中村 和代

はじめに

本シンポジウムの「変化する日常をどう捉え、いかに記録するのか」という課題に、私は「空間とローカル、ローカリティ」への昨今の学術的関心とその過程で展開された議論に注目し、そこから民俗学につながる方法を見出してみようと思う。正直なところ、このテーマはそれまでの私の研究と距離があるため、私の観点はまだ初歩的な段階に留まっている。しかし、それでも私がこのテーマを取り上げたいのは、これまで民俗学が追究してきた研究方法とある種の関連性を感じるからである。

柳田國男は、民俗が中心地から波紋が広がるように周辺に伝播する同心円状の様相を理論化した。ソジャ（Edward Soja）もまた、1920年代に米国の都市生態学（urban ecology）学派が、都市の空間的因果関係を説くために、同心円理論を空間分析の主な方法論として活用したことを伝えている［Soja 2015：286-287］。また、産業化時代の大衆媒体の影響力に注目したバウジンガー（Hermann Bausinger）は、民俗が大衆媒体を通じ、時間や空間、階層の境界を自由に超え移動する様相を、民俗学の主要な研究対象として置くべきであると説いていた［Bausinger 1990］。これらの事例からも、空間への関心、そして空間分析を通して生まれる可能性への認識は、予てから民俗学の方法論の中に胚胎されていたと判断できる。したがって、本発表では、これまでの隣接学問の空間に関する議論を概括し、そこから民俗学の特徴を活かした日常研究の方法を模索する。

1. 日常研究についてのパラダイム

社会学において日常への問いに本格的に取り組みはじめたのは、1960年代末から1970年代に至る時期である。当時日常という対象への学術的関心は、社会学に限られたものではなく、哲学、政治学、歴史学、心理学など、多様な分野に広がっており、研究の急増につながった。しかし、それらの研究は各分野それぞれが持つ伝統的な理論の中で展開されたため、背景論理やパラダイムといった包括的な理解までには至らなかった。それでも継続して多様な学術分野で「日常」という対象に関心が向けられたのは、それまで支配的であった既存の方法論の限界を指摘する批判的省察の流れとともに、既存の方法論では捉えることのできない新しい社会現象が急浮上したから

だと考える。

姜水澤（カンステク）によると、多様な学術分野で急増した日常研究には、緩やかではあるが次のような共有された観点があるという。

一、経済や政治など、特定の領域の論理で社会全体を説明しようとするのではなく、総体的な生活論理の観点で生活の主体である人間に注目する。つまり、日常は経済、政治など既存の社会構造、あるいは「体系」と呼ばれる領域の周辺や残余部分に領域として存在するのではなく、全ての社会活動の最も中心的な領域として想定される。また、日常の様々な暮らしの領域、例えば労働、余暇、家庭、その他社会的関係の諸領域は、それぞれが分離されているのではなく、内的世界では密接につながりあう総体的な単位として想定される。

二、英雄や専門家ではない、普通の人々の日常生活に関心を寄せ、普通の人々が見せる常識的知識や日常的実践の意味に注目する。つまり上から導入される支配的論理ではなく、下から生産される実践的論理に焦点を置く。また外側から観察する者ではなく、内側で参与する者となり、参与している自らの目を通して日常世界を把握するので、外側からただ眺める観察者の理論や概念ではない、生活主体の経験世界、主観的な意味、実践的な行為が土台となる日常世界の再構成を起こし、捉えようとする。要するに、「下から（von unten）」、そして「内から（von innen）」の観点に立つ。

三、生活主体の経験と思考を、静態、主観的に把握するのではなく、動態、脈絡的に把握する。このような観点は、個人と社会、主観と客観の二分法的対立を克服し、人間を、時間的、空間的、社会的な関係の中で絡み合っている存在として見る。

四、それぞれが学術領域の境界を越え、哲学、心理学、社会学、歴史学、政治学、経済学、民俗学、文学など関連する学問の学際的研究が必要であることも強調している。さらには、抽象的な理論構成と経験的研究の硬化した関係を批判し、双方の結合、特に経験を基にした理論構成の重要性を強調している［姜 1998：25-27］。

これら観点の共有は、前述の日常を対象とした多様な研究が、既存の社会科学の方法論とどのような差別化が図られているのかを明確に表している。しかし、そのためにそれらの研究が批判に直面してきたことも事実である。例えば、既存の構造に対する研究を主観的な経験で代替しようとする傾向、全体社会への俯瞰を欠如したまま微視的研究にだけ集中しようとする傾向、ひいては概念的分析を忌避し反分析的態度に留まる傾向などに対する批判が挙げられている［Kocka 1987：23-30］。

もちろん、全体社会の構造や変動を独立変数として扱う因果論的説明方式を、日常研究にそのまま適用するのは、それ自体が問題であるだけでなく、日常研究の目的や意義にもそぐわない。しかし、巨視的な社会構造や社会変動は個人の日常を可能にする社会的、歴史的環境であり、だからこそ、それらは個人よりも先に存在するということを看過してはならない。実際、この問題は従来の村落社会のように、予てから比較的小さな共同体で維持されてきた慣行の調査、研究を重ねた民俗学が、特に警戒しなければならない事案と考える。

ならば、前述のような観点が共有されながらも、微視的な次元の主観的な経験を扱った研究の批判に留まっていた過去の研究傾向を克服できる方法は何だろうか。そこには多角的な視点からの問いと深い討論が必要となる。その本格的な討論に進むための方法の一つとして、日常という対象への関心とともに向けられた、空間とローカル、ローカリティについての学術的な関心に注目してみる。

2. 日常と空間

前述で取り上げたように、「日常世界の内的存在」として、人間は時間的、空間的、社会的な関係の中で絡み合っている。したがって、人間が衣食住を解決し社会的な暮らしを続けていく日常生活の世界は、時間と空間、行為と構造が、その基本要素として内在している。言い直せば、「日常生活の世界とは、特定の時空間に沿って、その時空間の中で日々の行為を通じ形成される実態である」［金 1995：61］。つまり、時空間は人間の経験を組織する単純で形式的な仕切りに過ぎないのではなく、日常的な行為を実現している実存的基盤であり、日常生活を可能にする基本条件でもある。

しかし、このような本質的な特性にもかかわらず、空間は、時間を対象とする扱われ方とは違い、既存の社会科学分野において取り立てて注目される対象ではなかった。グンブレヒト（Hans Ulrich Gumbrecht）は、その理由を社会科学、特に啓蒙主義と近代性の産物として登場した社会学が、観念論的哲学から思想的な刺激を受けてきた流れの中で捉えている。肉体よりも意識を重視する哲学の影響下では、空間は肉体と繋がれ、時間は意識と結びつくという傾向が支配的であったというのである［Gumbrecht 1991：56、Schrör 2010：20］。このような傾向は、時間を移動性、力動性、進歩性、変動、歴史などの概念と結びつける一方で、空間を非移動性、停滞、反動、停止、堅固などと結びつける思考を一般化させた［Schrör 2010：21、Soja 2015：282］。その結果、空間は変動と変化を探究する社会学の理論にはそぐわない対象と認識され、近代化として代表する多くの社会変動が理論化される中、主として扱われることはなかった。

ところが、1960年代末になり西欧社会を席巻した68年学生運動と都市の危機は、空間への関心を新しく呼び起こす歴史的な転換点となった［Soja 2015：289］。当時、空間への関心の高まりを牽引したのは、ルフェーヴル（Henri Lefebvre）とフーコー（Michel Foucault）であった。ルフェーヴルは、1960年代の初めに状況主義者たちとの共同研究でヨーロッパのいくつかの都市を対象にその変化過程を追跡し、そこから生じた空間への問いを、資本主義批判と政治的代案の核とした。そして、すでに拙稿で指摘した「日常が作品になるようにせよ」という文化革命戦略を［丁 2017：243］「新しい社会、新しい暮らしは、新しい空間の生産で後押しできない限り、砂上の楼閣に過ぎない」という論に結びつけた［朴・金 2001：473］。

空間を穿鑿してきた地理学をはじめ、空間に付随していた支配的な思考は、空間を物質的な対象として、表面的でありかつ測量可能な対象と見なしていた。しかし、ルフェーヴルの核心をなす主張である空間生産論では、空間は単純な物質的対象ではない。空間は、私たちの日常的な「空間的実践（La pratique spatiale）」を通し作られる社会的な産物なのだ。それぞれが行う空間的実践は、その数だけ違う空間を作り出す。その点を踏まえて見ると、資本主義特有の家と職場、そして余暇空間の分離は、過去の時代とは全く違う方法で空間を組織した結果だと言える。

空間が日常的な実践の範囲と形態を組織するならば、日常で繰り返される実践から資本主義的空間はやはり再生産される。例えば、空間的実践は当初、利用者の使用価値中心で編成されるものとされてきたが、市場の交換価値によって空間の値付けが進むとともに各空間間で複雑な資本ネットワークが広がり、結果、その資本ネットワークに沿った、回し車を回るような日常的な暮らしが展開された。しかし、空間的実践がこのような支配秩序の再生産にのみ影響するのではない。近代的な科学技術と抽象的な知識の産物である「空間の表象（Les representatios de l'espace）」が[1]空間的実践に部分的に介入することで、資本主義的空間の再編と葛藤を誘起させる空間的実践が「抵抗の芽生え」となり作用しながら、新しい空間が生産されるのである［Lefebvre

2011、朴・金 2001：473-474]。ルフェーヴルは、この空間生産論を通して構造と行為を統合し、さらに日常的な暮らしの力動性と構造への抵抗の可能性を模索したのである。

3. 空間の再編

ルフェーヴルとフーコーの新しい空間論が、ジェイコブス（Jane Jacobs）とハーヴェイ（David Harvey）が論ずる空間についての批判的事由へ継承され、それは「空間論的転回」[2]という表現を登場させるほど空間についての学術的談論の増大につながった。その一方で、現実社会の急激な変動、即ちグローバル時代の到来も、やはり空間的事由を拡張させる重要な環境を作り出した。

グローバル化が、資本主義経済システムの推進力で生み出された結果ということに異論はない。ハーヴェイは、このような時代の特徴を「時空間の圧縮」と表現しているが、時間を通した空間的障壁の崩壊は、資本主義が展開する一連の歴史の中で持続的に進んできた。例えば、鉄道、電線、自動車、ラジオ、電話、ジェット機、テレビ、最近ではインターネット革命など、生産、流通のネットワークなどは、消費の全般で空間を合理的に組織する資本主義的な動機から生まれた代表的な事例である。その結果、グローバル化を「時空間の圧縮」と表現するだけでなく、「距離の死」「場所のない社会」「空間の収縮」「地理学の終末」「空間の終末」などの修辞が溢れた。

しかし、グローバル化が空間の消滅を招来したとの見方は問題がある。グローバル化に対する重要な抵抗の一つの形態として、グローバル（スケール）の対極にあるローカル（スケール）の再領土化が進められているからである。シュラー（Markus Schrör）は、交通、通信技術の発達によって経済的、政治的、社会的活動が特定空間を離れ自由になったと説き、空間が消えたのではないと強調した。むしろ、場所、もしくはローカルは、グローバルな影響力に反対・抵抗する立場を確立させたことで生き残ったというのである［Schrör 2010：193］[3]。ハーヴェイもまた、急変する世界の中で個人は自身のアイデンティティを確立する素地をローカルの中で見出すと指摘した。そして、このような「場のアイデンティティ（place identity）」は、資本に対抗する闘争において、制限的ではあるが効果的な力を発揮できると力説している［Harvey 2004：352-353］。これらの論理を踏まえ、シュラーは、グローバル化は空間の消滅だと主張する命題は、グローバル化によって国家政治の影響力が弱体化するという誇張と、一般的な意味での政治と国家政治を同一視し、空間を物質的領土と同一視するという限界を露呈したのだと批判した［Schrör 2010：193］。

資本主義の力動性と柔軟な蓄積（flexible accumulation）体系の発展もまた、ローカルの再領土化を促す。空間的障壁が少なくなるほど、「空間内の場所の差」に対する資本の感応度は高まるからだ。企業の立地戦略と結びつき、グローバル資本は時空間の圧縮によって確保された柔軟性と移動性をもって、ローカル労働市場の特殊性やローカル社会の文化的特徴あるいは伝統を、より精巧に活用できるようになった。1960年代の革命的スローガンだった「グローバルに考え、ローカルに行動せよ（Think globally, act locally）」が、グローバル企業のスローガンとして転用されたことからも考えられるように、グローバル資本がローカルを同質化させるその瞬間も、ローカルは資本に抵抗する場所なのだということを呼び起こさせ、抵抗の対象を暈していく。

このような前提に立てば、グローバル化が空間の消滅を招来したと見るよりは、境界で区切られていた国家が定める秩序を、「ローカル／ナショナル／グローバル」という新しい空間構造で再編していると見るのが妥当といえる。もちろん、この三つの関係は、ただ単にスケールの差に基づいた垂直的な組合せでは把握できない。これらは重層的であり、相互に浸透する複雑な形で、

お互いに影響を与えあっているからである。ユネスコ文化遺産条約がそうであるように、グローバル機構とグローバル協治（global governance）の論理が国内政治の論理に重なり合う一方で、ローカルの次元で発生した事件が、地球の裏側に存在するローカルに影響を与える事態を目撃することも多々ある。国際的な組織化によって国家の権力と機能が弱体化するかと思えば、国家のアイデンティティに基づいた国家間の緊張と葛藤が、グローバル協治の権威を脅かしているのも事実である。

結果、今日のグローバル化を把握するにあたって、既存の中心／周辺モデル、あるいは経済決定論のような還元論的な説明方式はもう相応しくない。アパドゥライ（Arjun Appadurai）は、グローバル化を、複合的であり、重層的であり、乖離（disjunctive）した秩序が生み出される過程として注目しなければならないと主張した［Appadurai 2004：60］。つまり、グローバル化は、経済、政治、文化など「多様な世界的な流れの間に存在する根本的な」乖離であり、そのような乖離の中で、あるいはそこを通じ創出された朧な情景の上に広がる「同一性と差異とのどこまでも多様化された相互競争の産物」と定義している［Appadurai 2004：79］。

4. ローカリティと日常研究

注目したいのは、ハーヴェイとシュラーが指摘した、ローカルと場のアイデンティティについての問いだ。まず、ローカルにおいて言えば、ローカルは「物理的、社会的空間の単位として地域、もしくは地方と呼ばれる国家下部の局地的単位」と定義付けることができるだろう［文 2016：307］。しかし、グローバル時代が捉えるローカルとして、このように客観的で空虚な定義付けは妥当でない。何より、大量移住とインターネットの拡散で、人びとの居住と活動の領域が脱領土化している。人びとは、安定的だった既存のローカルが持続的に侵食され内破的状況に直面しながら、場のアイデンティティ、即ち「ローカリティ」の、偶発的な、未完の形態での生産と構築に積極的に加わった［Appadurai 2004：345］[4]。

アパドゥライによると、ローカリティは「社会的直接性、個人間の相互疎通方法、脈絡の関連性などの一連のつながりで構成」され、「人間の行為の主体性、社会性、再生産可能性などを通して、それ自体を再現する現象学的資質」であるという。この資質は、「意図的な行為によって生産され、同時に特定の物質的評価を生み出す感情の構造」でもある。例えば、人びとは集団儀礼を通じローカルの主体を生み出し、特定の場所に名前をつけ、家や道、農地を造成し境界をつくることで、ローカリティを時空間的に生産してきた［Appadurai 2004：345］。ローカリティは、人びとが外部から入り込む一連の事態に対応しながら、自身を取り巻く諸々の条件を消化し、生きられる場に作り直していく実践の産物である。

この論理を、再びルフェーヴルの空間生産論と重ねて見ると、このローカリティはルフェーヴルが説く「空間的実践」と結びつくものであった。人びとは、資本主義の中で作られた抽象的・知的考案物で「空間の表象」に立ち向かい、空間の使用価値を最大限に引き上げることで、対抗空間を作る。ルフェーヴルはこれを「表象の空間（Les espaces de representation）」と呼んだ。この空間は、そこに植え付けられた支配的なコードを拒否したことで空白となった可能性の場を想像力で埋めるのだが、そこは感情に従い機能する空間として情熱と行動のための場所であり、体験の結果としての場所でもある。この空間の実例で言えば、自我、ベッド、部屋、家、広場、教会、墓地などが挙げられる。このような点から、表象の空間の本質は、質的であり流動的であり脈絡

的であり関係的なものだと言えよう。

ルフェーヴルは、この「表象の空間」こそ、民俗学者、人類学者、精神分析家が注目してきた対象だったと説いている。しかし彼らの問題はそれを対象として研究する過程で表象の空間と共存しながら一致や不和といった介入をする「空間の表象」を見過ごしたり、「空間的実践」をおろそかにしたりしていることなのだと批判する［Lefebvre 2011：91-92］。この指摘を消化するため、彼の論である空間生産の三元弁証法（trialectics）を用いて考えてみる。

再び、「空間の表象」と「表象の空間」の対立的関係を注視してみる。「空間の表象」が言語化された構造の秩序による支配的な空間規定の論理ならば、「表象の空間」は体験された空間性だ。科学的な空間認識、もしくは空間に対する厳格な体系化の試みが「空間の表象」の事例なら、芸術作品を通じた空間的な逸脱の試みは「表象の空間」の代表的な事例だと言える。例えば、ロンドンのスケートボーダーであったトビーは、リバプール・ストリートに伸びるオフィス街の道をベースに、スケートボードの練習に熱中する。彼の体感から生まれる練習の場としてのこの空間の使用価値と、オフィス街としてのこの空間の市場交換価値は、常に衝突する。彼は結局他の場へと追いやられてしまうだろうが、「ここはダメだ」と埋め込まれた「NO」の空間を、「ダメなことがあるか」と生きている体で「YES」の空間へと作り変えること、これが「空間の表象」と「表象の空間」の差である［Borden 1998：49、朴・金 2001：476］。

しかし、この二項の関係をただ対立的なものとだけで片付けられない。その視点で終わることは、理性的な意識で「自明の理」として精神的省察の対象のみに留まっているからである。この二項の対立的な関係によって空間が生み出される過程に注目すれば、互いが耐えず影響し合う関係ということを認識できるだろう。さらに、この二項の対立は、日常の実践様式として「空間的実践」を通じ多層化される。つまり「空間的実践」は、「空間の表象」と「表象の空間」の対立を総合的に反映しながら、時に確執を生みながら、二項とは違う層位から空間の総体的な生産に介入する。

空間の生産に関わるこの三つの契機の理解につながるよう、ルフェーヴルが活用する身体論を補足しよう。「空間的実践」-「空間の表象」-「表象の空間」という関係は、「知覚されたもの（身体器官を利用し外部の世界を知覚するもの）」-「認知されたもの（イデオロギーとともに普及される身体についての解剖学的、心理学的知識）」-「体験されたもの（辛いことや苦しいことで体験される身体）」と区別できる。この三要素が集合してはじめて、集団の構成員が一つの場から新しい場へとスムーズに進んでいけるのである。しかし、前述の三つの契機は空間の生産にそれぞれ違う方法で介入し、それぞれが交差する関係において、単純でもなく安定的でもない。したがって、この三つの契機を区別するものは、抽象的理論のモデルであり、原理的なアプローチであり、現実的な空間をしっかりと説明できるものではないので、具体的な空間の理解には歴史的なアプローチが必要となる［Lefebvre 2011：90］。

ルフェーヴルが、三元弁証法とそこから生産される空間の事例を歴史的に探究しようとする姿勢は、空間が基本的に政治的なものであることを伝え、資本主義の矛盾と葛藤がどのポイントで発生しているのかを認識させるためであった。そして、三元弁証法を通じ資本主義の支配的空間に抵抗する新しい差異の空間を作ること、何よりその可能性を探究することが、彼にとって日常と空間に注目する純粋な理由だった。

このようなルフェーヴルの空間生産論や、前述した空間についての議論は、日常研究の方法論に示唆するところが大きい。しかし、その分析事例についてより具体的にここで提示することは紙幅の関係上難しく、それらの事例に関しては、関連する内容の自著論文の参照を願う[5]。ここでは、空間についての議論に見られる日常研究への示唆の要点を提示し、結論としたい。

一、日常についての空間的アプローチは、日常研究において有効な方法と見なすことのできる空間的スケールを具体化する。

二、ルフェーヴルの空間生産論は、過去民俗学、人類学が見過ごしがちであった日常空間の多層的な構成様相を明らかにし、より力動的で重層的な姿で変化する日常を捉える手がかりとなる。

三、先に述べたように、「空間論的転回」のパラダイムは、空間の本質的特性が社会的であり、また政治的であることを一貫して主張している。故にこのパラダイムは、ローカリティ、つまり具体的な生の現場に広がっている日常の姿とそこに生きる人びとの空間的実践とを連動させ注目する必要性と、それが「差異の空間」を作る空間の政治と無関係ではないことを気付かせてくれるのである。

注

1　この用語は、ルフェーヴルが説く空間生産論の構成において核心となる概念である。詳しい説明は後述する。

2　この表現は、ソジャが1989年に初めて使用した表現だが、以降、社会・文化学者の間で定着した。端的に言えば、この表現は1970年代に登場した「言語論的転回」を意識し、皮肉交じりに空間についての学術的関心と議論の広がりを指して呼んだ言葉である［Soja 2015：7-17］。

3　ここで言う「場所（place）」という表現は、抽象的であり普遍的なものとして考えられた空間とは違う、具体的であり個別的であり限定的な意味を有する空間として特定するためのものである。

4　金碩洙（キムソクス）は、ローカリティを「地域性」と訳している。この「地域性」とは、「特定の空間と時間の中に置かれた体までを統合したものであり、単純な物理的空間性を超え、社会文化的な関係や意味などの存在する、実態としての生の現場」のことである［金 2010：35］。

5　丁秀珍（チョンスジン）2018「差異空間の可能性と不可能性－都市空間で村（マウル）づくり」『実践民俗学研究』31、実践民俗学会

参考文献

Appadurai, Arjun, 2004『고삐 풀린 현대성』(*Modernity at large*), 車元鉉他 訳, 현실문화연구.（Appadurai, Arjun 2004『手綱の切れた現代性』チャ・ウォンヒョン他 訳、現実文化研究）

Bausinger, Hermann, trans. Dettmer, Elke, 1990, *Folk Culture in a World of Technology*, Indiana University Press, Bloomington and Indianapolis.

Borden, Iain, 1998, "An Affirmation of Urban Life: Socio-Spatial Censorship in the Late Twentieth Century City", *Archis* 1998/5(special issue on the Great Britain).

Gumbrecht, Hans-Ulrichi, 1991, "nachMODERNE ZEITENräume", in:ders./Robert Weimann(Hg.), *Postmoderne – globale Differenz*. Frank-furt/M.,54-70.

Harvey, David, 2004『포스트모더니티의 조건』(*The condition of postmodernity*), 具東會 訳, 한울.（Harvey, David 2004『ポストモダニティの条件』グ・ドンフェ 訳、ハヌル）

Kocka, Jürgen, 1987『임금노동과 계급형성』(*Lohnarbeit und Klassenbildung*), 韓雲錫 訳, 한마당.（Kocka, Jürgen 1987『賃金労働と階級形成』ハン・ウンソク 訳、ハンマダン）

Lefebvre, Henri, 2011『공간의 생산』(*La Production de l'espace*), 梁英蘭 訳, 에코리브르.（Lefebvre, Henri 2011『空間の生産』ヤン・ヨンナン 訳、エコリーブル）

Schrör, Markus, 2010『공간, 장소, 경계』(*Räume, Orte, Grenzen*), 鄭仁模他 訳, 에코리브르.（Schrör, Markus 2010『空間、場所、境界』チョン・インモ他 訳、エコリーブル）

Soja, Edward, 2015「"시대정신"에서 "공간정신"으로：공간적 전회에 대한 새로운 왜곡들」, Döring , Jörg, & Thielmann,

Tristan(Hg.), 李起淑 訳,『공간적 전회』(*Spatial Turn*), 심산. (Soja, Edward 2015「“時代の精神”から“空間の精神”へ：空間論的転回についての新しい歪み」Döring , Jörg, & Thielmann, Tristan(Hg.)『空間論的転回』イ・ギスク 訳、シムサン）

姜水澤 1998『일상생활의 패러다임 – 현대 사회학의 이해』, 민음사.（カン・ステク 1998『日常生活のパラダイム – 現代社会学の理解』、ミヌムサ）

金碩洙 2010「21세기 사회에서 로컬리티와 인문학」『탈근대 탈중심의 로컬리티』, pp.19~50, 혜안.（キム・ソクス 2010「21世紀社会からローカリティと人文学」『脱近代、脱中心のローカリティ』、ヘアン）

金王培 1995「자본주의 일상생활의 세계」『한국사회학회 사회학대회 논문집』, pp.59~68, 한국사회학회.（キム・ワンベ 1995「資本主義日常生活の世界」『韓国社会学会社会学大会論文集』、韓国社会学会）

文載媛 2016「로컬리티 개념을 둘러싼 고민들」『로컬리티 인문학』15, pp.305~314, 한국민족문화연구소.（ムン・ジェウォン 2016「ローカリティ概念を取り巻く苦悩」『ローカリティ人文学』15、韓国民族文化研究所）

朴榮敏・金南州 2001 「르페브르의 공간변증법」, 국토연구원 편,『공간이론의 사상가들』, pp.470~481, 한울.（パク・ヨンミン, キム・ナムジュ 2001「ルフェーヴルの空間弁証法」国土研究院編『空間理論の思想家たち』、ハヌル）

李尙峰 2008「탈근대, 공간의 재영역화와 로컬·로컬리티」『한국민족문화』32, pp.1~30, 한국민족문화연구소.（イ・サンボン 2008「脱近代、空間の再領域化とローカル・ローカリティ」『韓国民族文化』32、韓国民族文化研究所）

丁秀珍 2013「글로벌 시대의 한국민속학과 로컬리티」『민속학연구』33, pp.167~187, 국립민속박물관.（チョン・スジン 2013「グローバル時代の韓国民俗学とローカリティ」『民俗学研究』33、国立民俗博物館）

丁秀珍 2017「미디어의 일상화, 일상의 미디어화」『일상과 문화』3, pp.241~252, 일상과 문화연구회.（チョン・スジン 2017「メディアの日常化、日常のメディア化」『日常と文化』3、日常と文化研究会）

丁秀珍 2018「差異空間의 可能性과 不可能性-都市空間에서 마을 만들기」『実践民俗学研究』31, pp.109~135, 実践民俗学会.（チョン・スジン 2018「差異空間の可能性と不可能性ー都市空間で村づくり」『実践民俗学研究』31、実践民俗学会）